

英国大学図書館におけるインフォメーション・コモنزと情報リテラシー教育

和田 由季, 津村 光洋, 日野 美穂

抄録：平成 22 年度国立大学図書館協会海外派遣事業および広島大学後援会国際交流助成事業として、11 月 29 日より 9 日間の日程で英国の大学図書館などを訪問した。独立したインフォメーション・コモنزを持つグラスゴー・カレドニアン大学とシェフィールド大学について報告する。また、シェフィールド大学については、インフォメーション・コモنز内で受けた情報リテラシー教育の模擬ガイダンスについても報告する。国内各大学図書館のラーニング・コモنزのこれからの役に立てるヒントを提供する機会としたい。

キーワード：イギリス, 大学図書館, インフォメーション・コモنز, ラーニング・コモنز, 利用教育, 利用者教育, 情報リテラシー教育

1. はじめに

1.1 目的と訪問機関

平成 22 年度の国立大学図書館協会（以下、国大図協）海外派遣事業および広島大学後援会国際交流助成事業として、11 月 29 日より 9 日間の日程で英国の大学図書館を訪問する機会を得た。

調査の目的は、ラーニング・コモنز先進国英国の図書館及び関連施設を訪問し、ラーニング・コモنزを中心とした図書館施設設置のコンセプト、運用の仕組み、効果等について実地調査を行い、併せて、情報リテラシー教育を始めとする利用教育の実施状況、実施体制、効果等についても調査するというものである。

訪問機関は、シェフィールド大学とグラスゴー・カレドニアン大学である。シェフィールド大学では 2007 年にラーニング・コモنزを中核とする大規模な独立施設を新設し情報リテラシー教育を熱心に展開しており、グラスゴー・カレドニアン大学もまた、図書館機能を含む独立したセンターを 2006 年に新設している。また、ラーニング・コモنزとの比較のために、英国図書館と伝統的な大学図書館であるオックスフォード大学ボードリアン図書館の見学も行った。

なお今回は、国大図協の派遣事業による和田由季（広島大学図書館）と津村光洋（鳥取大学附属図書館）の調査に加えて、同様の目的で広島大学後援会国際交流助成事業に採択された日野美穂（広島大学図書館）の調査も合同で行うことになった。

1.2 日程

全体の日程は、以下のとおりである。なお、この間ヨーロッパは大寒波に襲われたが、予定どおりに訪問することができた。

11/29 (月) ロンドン経由でグラスゴー着
11/30 (火) グラスゴー・カレドニアン大学ソルタイヤ・センター訪問
12/1 (水) グラスゴーからシェフィールドへ
12/2 (木) ~12/3 (金) シェフィールド大学図書館訪問
12/4 (土) シェフィールドからロンドンへ
12/5 (日) オックスフォード大学ボードリアン図書館訪問
12/6 (月) 英国図書館訪問, ロンドンから日本へ
12/7 (火) 成田着

1.3 「ラーニング・コモنز」と「インフォメーション・コモنز」

今回訪問した 2 大学ではラーニング・コモنزの名称として「インフォメーション・コモنز」を使っている。厳密には、インフォメーション・コモنزをラーニング・コモنزの前段階の施設として区別する場合もあるが、本稿では両者をほぼ同種の施設と考え、「インフォメーション・コモنز」に表記を統一することとし、文脈により適宜「ラーニング・コモنز」を使用する。

2. インフォメーション・コモنز

2.1 グラスゴー・カレドニアン大学 ソルタイヤ・センター

Glasgow Caledonian University
The Saltire Centre

<http://www.gcu.ac.uk/thesaltirecentre/index.html>

2.1.1 グラスゴー・カレドニアン大学とソルタイヤ・センターについて

グラスゴー・カレドニアン大学は、スコットランドのグラスゴーにある大学で、その歴史は前身であるクイーンズ・カレッジが設立された1875年まで遡る。近代的なビル群が建つキャンパスは市内中心部にあり、バスセンターや鉄道ターミナル駅からもすぐという立地の良さである。学生数は約17,000人で、ビジネス、健康、科学技術分野で6つのスクールがある¹⁾。

ソルタイヤ・センターは、図書館機能を含む「キャンパスの社会的な中心、学生が勉強するとともに人と出会い交流する場所」²⁾として計画され、2006年1月にオープンした。キャンパスに入ってまっすぐの突き当たりには建っている5階建ての建物がそれで、マリンプルーの円筒型付属建築物が印象的である。独立はしているが、北国であることもあってか、他の建物とは渡り廊下などを通して外に出ることなく行き来ができるようになっている。



写真1 ソルタイヤ・センター外観

参考文献として、Jan Howden 著「The Saltire Centre and the Learning Commons concept」³⁾を読んでいた。これを基に、訪問前に以下の質問をインフォメーションサービス担当のSonya Campbell 女史に提出していた。

1. ソルタイヤ・センターにおける、図書館と他の大学部門とのサービスや空間の共有状態はどのようなになっているか?
2. ソルタイヤ・センター各フロアの構成について
3. 学生のソルタイヤ・センターの利用形態(個人学習やグループ学習など)について
4. ソルタイヤ・センターオープン後の図書館や図書館職員の大学内における変化の有無について
5. ソルタイヤ・センターの現在の問題と将来

の目的について

2.1.2 ソルタイヤ・センター内の様子(質問1, 2, 3)

訪問当日は、上記質問に沿った形の案内や説明を約半日かけて受けた。

Campbell 女史によれば、ソルタイヤ・センターの特徴は、次のとおりである。

- ・リラックスできる、会話が出来る空間
- ・様々な学習スタイルに対応できる空間
- ・学生自身で利用できるサービス(セルフサービス、セルフラーニング)を提供

これらの特徴を踏まえながら、当センターの建物構成をまとめてみる。

4階(日本でいう地上5階): 最も静かな学習フロア(“Silent floor”), パソコンは使えるが、持ち込みのみ

3階: 静かな学習フロア

2階: やや静かな学習フロア(ここまでが“Quieter Area”, 実際は結構にぎやか), グループ学習フロア

1階: 入口, グループ学習フロア, 職員の事務室
地階: ロビー, 相談カウンター(「ベース」と呼ばれる), グループ学習フロア, カフェ

セルフサービスのための自動貸出装置やコピー機は、各階に設置されていたが、2階以上では防音のためパーティションで四方を囲んだ中に置かれていた。

また、センター内には、400台のデスクトップ・パソコンが設置してある(大学全体では800台)。無線LANのアンテナも整えている。最上階の“Silent floor”でも一角でパソコンは使えるようであるが、ほとんど使っていないようであった。この階は、キーボードをたたく音さえも憚られるような静寂な空間であった。

各フロアが色分けされていることが、特に印象に残った。下の階はビビッドな黄色やオレンジ色が多用されているが、上の階に行くほど落ち着いた色調になっていて、最上階はブラウンとグレーを基調とした空間となっていた。閲覧室だけでなく、トイレの中まで同様に色分けされていたのには驚かされた。また、什器類も各階で異なっていた。例えば、1, 2階には大きくてカラフルなクッションが置いてあって、床に座ってくつろいだ姿勢で話が出来るといったような雰囲気になっていた。一方、最上階には、座面が低めでゆったりと本を広げることができる長椅子があった。また、グループ用には布状のもので幌馬車の幌かテントのように空間を仕切るなど、見た

こともないような調度品が置いてあって、楽しい空間が提供されていると感じた。

1階入口に小さなカウンターがあり、職員が1人配置されていたが、ここは来館者の受付だけの感じであった。(我々もここで訪問の旨を告げて、Campbell 女史を待って面会した。)これに対して、地階の相談カウンター「ベース」がレファレンスの窓口になっている。ここにはパートタイマーや学生アルバイトを数名配置し、簡単な質問については彼らに対応し、専門的なレファレンスのみを司書に取り次いでいる。

また、「ベース」ではメディア系の支援、学生の経済支援や留学生支援についても対応しているとの説明があった。図書館のウェブサイトによると、ここではさらに「経済支援、就職支援、育児支援、就学支援、留学生支援」⁴⁾といった幅広いサービスを提供しているとある。これを象徴するように、カウンター付近には学生生活に必要な様々なパンフレットなどが置いてあり、その中からソルタイヤ・センターの案内を探し出すのに苦労したことを覚えている。

北米等のラーニング・コモنزでは、マサチューセッツ大学アマースト校の De Bois 図書館のように、レファレンスの窓口とは別に、従来の図書館にはなかったライティングセンターやキャリアセンターのカウンターを設置し、専門の職員を配置している事例があり、すでに日本でも紹介されている。ソルタイヤ・センターでもこうした先行事例と類似した幅広い学生サービスを行っていることが確認できた。

ただ、図書館以外のサービスのために配置されている職員数は見たところ1~2名であり、この人員でこうした様々なサービスを提供するとなると、その内容は自ずと限定されたものになると思われる。また、マサチューセッツ大学アマースト校のように、キャリアセンターなどがそれぞれ独自のカウンターを設けている事例に比べると、レファレンス・カウンターの一角でそれらを行っているというやや控えめな感じであった。全体的な印象では、ソルタイヤ・センターが学生を引きつける最大の要因はあくまで多様な学習スペースの提供にあり、図書館以外の学生サービスを受けられることは、いくつかの副次的な要因の一つと考えた方が良さそうである。質問1については、ソルタイヤ・センターは図書館が学内の他部門が共有するスペースというよりも、あくまでも図書館部門のスペースであり、その中に他部門のサービスポイントがある、と考えるのが妥当であろう。

ソルタイヤ・センターの下層階にはカフェもあって学生の集う賑やかなスペースとなっており、そこから上の階に行くほど我々のよく知る静寂な図書館の雰囲気になっていった。ソルタイヤ・センターの中に、学生の憩いの場と従来の図書館が共存しているという感じであった。



写真2 ソルタイヤ・センター4階



写真3 ソルタイヤ・センター1階

2.1.3 ソルタイヤ・センターと図書館 (質問4, 5)

見学の途中、シニア・ライブラリアンの Marion Kelt 女史ら3名の図書館職員の方からもお話を伺った。それをまとめてみると次のようになる。

・当初は静寂スペースなどのゾーニングが明確ではなかったが、毎年(アンケート等で)利用調査を行ったところ、伝統的な図書館の空間を望む声も多く、その都度結果をフィードバックして机や椅子を配置しなおすなどして、現在のかたちになった。

- ・ソルタイヤ・センターで様々なことができるので、利用者が集中している問題がある。
- ・大学のビジョンや目標との関連が大切。
- ・入学希望者の増加や就職率の向上に貢献するなど、ソルタイヤ・センターによる大学のブラン

ド化を重視している。

- ・伝統的な図書館と新しい学習空間のバランスのとれた共存関係をつくりだしてゆくことが今後の課題である。

以上の話からは、図書館機能を含むとは言え、大学の目指すところを抜きにしたセンターの運営や将来計画はあり得ないという、当センターと大学との関係が窺える。

2番目の「利用者が集中している」ことについては、ソルタイヤ・センターが成功している表れだと考える。センターには大学が管理しているデスクトップ・パソコンの約半数を設置し、各フロアの椅子やインテリアなどを利用形態に合わせて配置し、地階の相談カウンター「ベース」に学生サービスの窓口を集めて、と利用者確保のための幾重もの工夫が見られる。ソルタイヤ・センター1年目の学生への調査では、95パーセントが当センターを「いつも」・「定期的」・「ときどき」は使用し、79パーセントが「非常に満足」・「満足」と回答している⁵⁾。「利用の集中」はまさに望んだ結果であるわけだが、もしその対策を考えるとすれば、後述のシェフィールド大学のインフォメーション・コモنزが、当初から増改築を考えていたという点で一つの解決策を提示しているように思われる。

また、ラーニング・コモنزを開設したばかりの図書館から来た我々にとって非常に印象に残った空間設計が初めからできあがっていたわけではないこと、利用者の声に耳を傾けた結果（まだ過程か）であること、など大切なことを教えていただいた。

すっかり日の落ちた中、青い電飾の大きなクリスマスツリーを眺めながら、雪のソルタイヤ・センターを後にした。

2.2 シェフィールド大学 インフォメーション・コモنز

University of Sheffield

Information Commons

<http://www.sheffield.ac.uk/infocommons>

2.2.1 シェフィールド大学図書館について

シェフィールド大学は、英国中部のシェフィールド市内に位置する。1905年設立、学生数約24,000人の英国有数の総合大学である。図書館は、以前は13の分室等に分散していたが、整理統合を行い、現在では中心となるインフォメーション・コモنز、ウェスタン・バンク図書館の他、病院図書室など4館から構成されている。

インフォメーション・コモنزが学部生を対象と

した学習用の図書館であるのに対し、1959年開館のウェスタン・バンク図書館は、現在では研究用の図書館となっていて、大学の蔵書のほとんどがここにあり、図書館の事務室もこの建物内にある。ウェスタン・バンク図書館では法律の規制のためになかなか改修を行うことができず、ほとんど開館当時のままの状態とのことだった。

なお、ウェスタン・バンク図書館には充実した日本関係資料のコレクションがあり、2日間にわたって我々がお世話になったのは、このコレクションを担当する Gill Goddard 女史である。

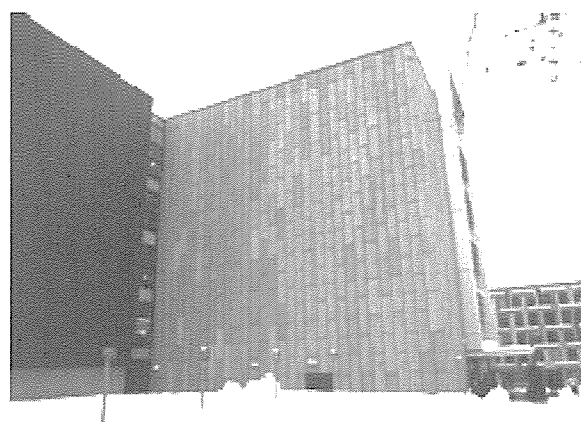


写真4 インフォメーション・コモنز外観

2.2.2 インフォメーション・コモنزの計画と背景

インフォメーション・コモنزの計画自体は1998年に始まった。2004年に最終的な計画が学内で了承され、2005年5月に建設を開始、2007年4月にオープンした。7階建てのインフォメーション・コモنزの外観は、斬新なデザインで非常に印象的である。

我々が訪問した当日、大雪のため大学全体が休講となっていた。当初案内していただく予定の方が雪のため出勤できず、急遽、図書館長の Martin Lewis 氏にインフォメーション・コモنزを案内していただいた。Lewis 氏はインフォメーション・コモنزに計画段階から関わって来られたインフォメーション・コモنزに最も詳しい方とのことである。

Lewis 氏はインフォメーション・コモنزを作った理由として次の2点を挙げた。1点目は以前ウェスタン・バンク図書館内にあったパソコン・ルームの利用者が非常に多くなり、学生が長時間利用するには不向きだったことである。このことは、インフォメーション・コモنز完成前にウェスタン・バンク図書館を訪問された方による「PCコーナーに

約 100 台のパソコンが設置されているものの、不足気味で利用待ちの学生の列ができていた」という報告からも確認できる⁶⁾。

2 点目は図書館とパソコン・ルームの空間的な断絶を解消し、紙媒体の資料と電子的なリソースを統合的に利用できる空間を目指したということである。

シェフィールド大学のウェブサイトには、これらの点を含めて、インフォメーション・コモنزの計画の目的を以下のようにまとめている。

- ・ 学習スペースの大幅な増加
- ・ 質が高く、過度に混みあうことがなく、学生に印刷媒体と電子媒体のリソースを同じ机の上で利用する場所を提供することができる新しい学習空間の創造
- ・ 静かな個人学習室から予約可能なグループ学習室まで、様々な学習スタイルをサポートする多様な学習空間
- ・ 11 万冊の学生用テキストのコアコレクションの収容能力
- ・ 無線 LAN と大部分の学習用デスクに設置するデスクトップ・パソコンを含む IT 設備
- ・ 身体障害のある学生が完全に自由にアクセスできる空間
- ・ 1 日 24 時間、週 7 日間無休で利用できるよう計画され、優れたセキュリティを持つ環境
- ・ 高度に機能的かつフレキシブルで、学習パターンと技術の変化に対応できる建物
- ・ 新しい主要な建築としてキャンパスと町を代表し、シェフィールド大学がそれによって学生への学習スペース提供における主導的な地位を得られるような象徴的な建物⁷⁾

インフォメーション・コモنزによって、まさにこれらの目的が達成されているというのが見学後の感想である。

2.2.3 インフォメーション・コモنز内の様子

インフォメーション・コモنزは、レベル 0～6 (日本でいう 1～7 階) のフロアを持つ 7 階建ての建物である。中央部分はレベル 0 から 3 にかけて吹き抜けとなっている。内部には 1,350 席の学習スペースに 550 台のデスクトップ・パソコンが設置されており、また、全域で無線 LAN が利用可能である。

建物の入口には、IC 身分証で入館できるゲートがあり、その横には警備の職員が常駐している。ゲートの認証で入館者の状況を常に把握することに

より、セキュリティの向上にも役立っている。

ゲートの側には資料の返却口がある。資料の貸出・返却はこの返却口と館内に複数設置されている自動貸出装置により、すべてセルフサービスで行われている。返却口の裏側では、ベルトコンベヤーのような機械で返却資料が自動的に配架先の階ごとに仕分けされるようになっていた。インフォメーション・コモنزでは人件費削減のため、可能な限りこうしたサービスのセルフ化や自動化を行っているとのことである。

入口の正面には、インフォメーション・デスクというカウンターがある。ここと一つ上の階のカウンターで、それぞれ図書館サービス、IT サポートのサービスを分担している。地階には入口の横にカフェもあり、サンドウィッチなどの軽食を食べることができる。カフェの一角にもメールのチェックなどができるパソコンが並んでいた。

建物中央の吹き抜けスペースは開放的な雰囲気である。各階ごとに基調となる色が決められており、家具や壁の色が統一されていた。

レベル 1 から 3 (2～4 階) にかけて開架式の書架があり、テキスト類を中心に大学の蔵書全体の 6 パーセント相当、約 11 万冊の資料が置かれている。このあたりは会話のできる学習スペースで、集まった学生でにぎやかな雰囲気だった。講義や講習会に利用される教室や、数名で利用できるグループ学習室も複数設置されていた。

レベル 4 以上は全域が個人学習専用のスペースである。個人用の机では一人当たりのスペースがたっぷりとられ、長時間学習に適した学習スペースのように感じた。外のトラムや車の騒音を遮断するため、窓は開閉できない密閉式、壁面や天井にも騒音を吸収する素材を用いるなど、細かな配慮がされていた。



写真 5 インフォメーション・コモنز吹き抜け

また、建物内の案内には電子掲示板が多用されている。これらによりインフォメーション・コモンズ内のパソコンの空き状況をリアルタイムで表示する他、BBCのニュースや天気予報も流されていた。

2.2.4 印象に残った点

見学してまず印象的だったのは、会話のできるスペースが賑やかであるのに対して、個人用の学習スペースでは完全な静寂が保たれており、両者の区分けが徹底していた点である。2009年11月にここを訪問した逸村裕氏も指摘されているが⁸⁾、両者は壁で仕切られた完全な別スペースで、個人学習スペースに一步入ると誰一人話をする者がなく、学生が黙々と勉強しているのが印象的だった。

Lewis氏によれば、開館当初は静かなスペースと会話可能なスペースとをきちんと分けていなかったが、学生の希望調査を行ったところ個人用の静かな学習スペースを求める声が多く、その意見をフィードバックして現在のような明確なゾーニングを行ったとのことである。

また、学部や学年によって利用の仕方は異なっているので、学生の利用を注意深く観察して、それに合わせて空間をアレンジしてゆくことが大切であると言われていた。

興味深かったもう一つの点は、インフォメーション・コモンズでは将来、図書館をめぐるメディアの刷新（例えば電子ブックの普及など）が生じて、それに合わせて容易に改築やアレンジを行えるように工夫して建物が計画されているという説明である。インフォメーション・コモンズは当初から建て増しも予定しており、将来予算がついたときには、横の空き地に拡張を行うとのことだった。

イギリスでは町を歩いていると、何百年も前の建物を利用して店舗や住居をつくるなど、古いものを残しつつ新しいものと融合させるセンスに感心させ



写真6 インフォメーション・コモンズ個人学習スペース

られるが、何十年も先を見越したこうした計画は、いかにもそうした伝統のある国らしいと感じた。

なお、北米等のラーニング・コモンズで行われ、これまで日本でも紹介されているような、論文の作成指導や学習・学生生活全般に関わる相談といったサービスにはあまり力点がおかれていないようで、それよりもむしろ、多様で快適な学習スペースの提供に力を入れている印象を受けた。

2.2.5 インフォメーション・コモンズの問題点

次にインフォメーション・コモンズの運営の中で生じている問題点について見てみたい。

インフォメーション・コモンズでは開館以来、館内の清掃が大きな問題となっている。開館当時は24時間開館のため、とくに朝などはゴミが散乱してひどい状態だったとのこと。見学前にも、Lewis氏から、あらかじめ「残念ながら、あまりきれいな状態でお見せすることができない」と説明され、見学の途中で実際に床に菓子くずが散乱しているところもあった。また、場所によっては壁の汚れがひどく、毎年塗り替えているところもある。清掃は入館者の少ない早朝などに、区画ごとに立ち入り禁止にして行うなど、「多くの点で24時間開館の図書館や学習スペースは、大学の既存の建物よりも、空港のターミナルのような建物に清掃やメンテナンスの面で共通している」とのことである⁹⁾。

また、インフォメーション・コモンズができてから、学生と図書館職員のコミュニケーションが変化したという話もあった。具体的には、学生が直接カウンターや図書館に来なくなり、メールやブログ、ツイッターなどによるやり取りが増えたとのことである。

Goddard女史は「学生がウェブで資料の検索や予約をするため、書架のブラウジングで多くの本と接する機会がなくなり、予約で取り置きされる資料は長時間他の利用者が使えない。その一方で、図書館員の仕事は学生の予約資料を書架から集めるだけになり、これでは荷役の牛や馬 (beast) みたいだわ」と嘆いておられた。Lewis氏は、こうした状況は図書館員の専門性にとってはリスクとなると述べていた。他方で、職員の中には統計的に見ると学生の満足度はインフォメーション・コモンズができてから向上している、と変化をむしろ前向きに捉えている方も複数おられた。

こうした変化も関係してか、職員は以前のような近寄りたがたい図書館員のイメージを払拭し、学生たちに自分たちをより身近に感じてもらおうと、顔写真の入ったポップなデザインの名刺をつくったり、

自分でブログを運営するなど知恵を絞って努力されている様子だった。

3. インフォメーション・コモنزと情報リテラシー教育

グラスゴー・カレドニアン大学、シェフィールド大学の両図書館では、情報リテラシー教育を始めとする利用教育の実施状況、実施体制、効果等について伺うことができた。両図書館は、インフォメーション・コモنز内の1室でガイダンスや講習会をし、学習のサポートを行っている。

3.1 シェフィールド大学の情報リテラシー教育

シェフィールド大学では、新入生向けに用意されているガイダンスを模擬的に受けることができたので、その内容を紹介する。ガイダンスは、講師の司書と、パソコン操作担当のアシスタントの2名一組で行われる。

会場の部屋は、講師のパソコン画面が、壁三面に設置された3台のモニターへ映し出され、学生はどのモニターを見ても構わないという、大変自由な空間だった。こうしたスペースができたおかげで、従来よりも講習が行いやすくなったとのことである。

ガイダンス時間は30分程度である。まず、学生に、青色、黄色、ピンク色というカラフルなカードから無作為にカードを選ばせる。このカードには、図書館に対する様々な質問がレベル別に書かれている。例えば、以下のような質問内容である。

青色：[基本事項] Do I need to visit the library?

黄色：[資料や機器の場所等] What if the book I want isn't on the shelf?

ピンク色：[施設の利用法等] My group has to prepare a presentation. Is there somewhere we can work together?

講師は、質問内容の比較的易しい青色のカードを持った学生から質問を読ませ、順次、解答のスライドをモニターに映し、その説明を読む。シンプルな質問と機械的な回答のやりとりが、テンポよく繰り返される内に、徐々に学生の興味を引く仕掛けになっている。事前に用意した質問15問が終了すると、今後の質問や相談のためのメール、電話やツイッター等の連絡先を案内し、プログラムは終了する。ガイダンスには無駄がなく、非常にコンパクトにまとめられており、必要な情報を短時間で伝えるようにできている。なお、こうしたガイダンスには、学生がカリキュラムの中で必ず受講しなければ

ならないものと、図書館が自主的に開催するものがある。

模擬ガイダンス後、講師2名に話を伺った。大学生対象のガイダンスに、ゲーム感覚を残すと、幼稚なものになりかねないという悩みは、日本と同様である。図書館員が長時間しっかり説明をしても、学生の眠気を引き起こすようでは意味が無い。大学入学当初のガイダンスは、図書館内の細かい説明よりも、まず図書館という施設に関心を抱かせることの方が大事に思える。それは、どの国の利用教育担当者も共通に思うことだと実感し、談笑した。また、現行の学生参加型ガイダンスに至るまで、繰り返しフィードバックを行っており、現在もガイダンスや講習会に参加した学生には、意見や感想を付箋に書いてもらうようお願いしているとのことである。形式張らないメモのように書き残せる付箋が、学生のさりげない意見を拾うことができるのかもしれないと思えた。

新しく作られた学習空間を活用し、以前とは違った興味深いガイダンスや講習会が行われ、順調に見える一方で、講習スペースの確保という新たな悩みを抱える大学もある。グラスゴー・カレドニアン大学のソルタイヤ・センターでは、グループ学習フロアの1室を講習会用の部屋として使用していたが、シェフィールド大学のインフォメーション・コモنزには、講習会用の部屋が無いため、講習会を行う際はその都度、利用教育担当の職員がグループ学習室を予約して使用している。我々が模擬ガイダンスを受けた部屋の前には予約表があり、予約の無い時間帯は学習スペースとして使用されている。

本来、インフォメーション・コモنزは、学生の自主性を重んじた学習空間である。学習空間を優先的に考えた結果、自然と利用教育を行う場所が限られてしまうのは仕方がないことである。講習スペースの確保という悩みを持ちながらも、新しく作られた学習空間をいかに活用し、講習会等を行うかという課題へ焦点を移している利用教育の担当者から、柔軟性と努力を感じた。

また、オンライン教材も利用教育の充実に一役買っている。模擬ガイダンス後、オンライン・チュートリアル教材について紹介していただいた。学生が各自で指定されたウェブサイトアクセスし、画面に表示されるいくつかの質問に順に答えてゆく形式のものである。これは5、6年前に試行的に始められたもので、開発は司書が教材作成を担当する部門と協力して行い、その後改良を加えて現在のような形になっているという。学生には、ガイダンスの前後などにオンライン教材を補助的に使用

してもらっているとのことであった。時間に制限のあるガイダンスのため、場所を問わず学習できるオンライン教材を効果的に活用しているようだ。

3.2 模擬ガイダンスを受けて（情報リテラシー教育の感想）

以上のように模擬ガイダンスを受け、説明を聞いた全般的な感想としては、情報リテラシー教育の実施状況について、英国と日本の大学とでそれほど目立った違いはないというのが正直なところである。例えば、学生の必修授業としてガイダンスを行ったリ、図書館の中の個別の部屋をその会場として利用するという形は日本の多くの大学図書館と同じであるし、オンライン・チュートリアルに関しても日本の先進的な大学図書館ですでに実施している例があるからである。

我々の印象に残った点として、付け加えたいのは次の点である。情報リテラシーの実施体制に関連して、模擬ガイダンスをしていただいたのは司書の方と、図書館内の教材作成を担当する部門に所属する技術系の職員の二人であったが、情報リテラシー教育に関連して、このように司書が他の職種と連携して行う業務が予想以上に多く、重要なポイントとなっているようである。

シェフィールド大学図書館の職員構成に関していうと、いわゆる司書の他、技術系の職員や一般事務系の職員が多くの割合を占めている。司書の肩書きのある職員の多くは「ファカルティ・リエゾン・チーム」という部門に属しているが、ここに属する10数名の司書は、全員が「リエゾン・ライブラリアン」としてそれぞれ専門の領域を持っている。いわゆる「サブジェクト・ライブラリアン」のシステムで、各々が担当分野の学部の教員と連携しながら学生のための学習サポートを行っている。

例えば、シェフィールド大学図書館ではウェブサイトの中にシラバスの科目ごとに関連文献など教材のリストをつくっている。ここからリンクをたどって電子ジャーナルの論文などを直接閲覧することができる、いわば関連教材へのリンク集のようなものであるが、教員から提出されたリストをもとにこのリストをつくるのもリエゾン・ライブラリアンの仕事である。こうしたものも教員との連携、そして前述のオンライン・チュートリアルと同様に、教材作成のIT部門の職員との連携なくしてつくることは不可能であろう。

我々は欧米のサブジェクト・ライブラリアンという、各々がもっと独立的に自分の分野の業務を行っているものとイメージしていたが、ここでは予



写真7 インフォメーション・commons内、模擬ガイダンスの後で

想以上にオープンに、同僚や教員、他の職種のスタッフと密接に連携しながら、情報リテラシー教育の実施や教材の作成を行っている印象を受けた。そして、このように様々なスタッフと連携しながらプログラムを企画してゆくことができるコミュニケーション能力や実行力が大学図書館の職員に要求されているのは、日本でも英国でも同じであるようだ。

4. おわりに

広島大学図書館、鳥取大学附属図書館ともに、平成22年4月、ラーニング・commonsがオープンした。従って、自館のラーニング・commonsの現状を念頭に置いての今回の訪問であった。

なによりも勇気づけられたのは、シェフィールド大学もグラスゴー・カレドニアン大学も、試行錯誤の末に今のインフォメーション・commonsに到達したということである。いや、まだ過程であるという方が、お話を伺った印象では正しいといえる。利用者の声を聞きながら、変えてきた、変えてきているという言葉は、我々の心に深く残っている。

最後に、今回の調査訪問の機会を与えていただいた国大図協、広島大学後援会をはじめとした関係各署の方々、現地図書館で暖かく受け入れていただいた方々、および長期にわたる出張に快く送り出していただいた広島大学図書館と鳥取大学附属図書館の皆さまに感謝いたします。

注記

- 1) Glasgow Caledonian University. "About the University". (online), <http://www.gcu.ac.uk/theuniversity/aboutglasgowcaledonian/abouttheuniversity/>, (accessed 2011-03-18).
- 2) Howden, Jan. "The Saltire Centre and the Learn-

- ing Commons concept". Learning commons : evolution and collaborative essentials. edited by Schader, Barbara. Oxford, Chandos, 2008. p. 205. (ISBN 9781843343134)
- 3) Howden, Jan. 前掲2), p.201-225.
- 4) Glasgow Caledonian University Library. " The base" (online), <http://www.gcu.ac.uk/library/studentservices/thebase/>. (accessed 2011-07-15).
- 5) Howden, Jan. 前掲2), p.208.
- 6) 大塩和彦, 真野博和. 英国の図書館訪問記. 館燈. 2004, 151, p.5.
- 7) The concept and history of the IC. (online), <http://www.sheffield.ac.uk/infocommons/visitors/history>. (accessed 2011-03-17).
- 8) ラーニング・コモングャー. "ラーニング・コモングャーのブログ". (オンライン), <http://tsukubalc.blog.fc2.com/blog-date-201007.html>, (参照 2011-03-17).
- 9) Lewis, Martin. The University of Sheffield Library Information Commons: A Case Study. Journal of Library Administration. 2010, 50, p.171-178.

< 2011.4.4 受理 わだ ゆき 広島大学 社会連携・広報・情報室 図書学術情報普及グループ, つむら みつひろ 鳥取大学附属図書館学術情報担当, ひの みほ 広島大学 社会連携・広報・情報室 図書学術情報普及グループ >

Yuki WADA, Mitsuhiro TSUMURA, Miho HINO

Information commons and information literacy education in university libraries in the United Kingdom

Abstract : The authors toured university libraries in the United Kingdom for 9 days from November 29 2010 under the auspices of the Japan Association of National University Libraries Overseas Training Program and the Hiroshima University Support Foundation's International Exchange Program. The authors report on stand alone information commons that they saw at Glasgow Caledonian University and at Sheffield University. Also, they report on an information literacy education demonstration that they received in the Information Commons at Sheffield University. The authors hope that the information that they have gathered will be useful to Japanese academic libraries developing their own learning commons.

Keywords : United Kingdom / university libraries / information commons / learning commons / user education / information literacy education